生活とまなびの幼小カリキュラム
「あんじょう」

～ なめらかな接続をめざして ～

柏原市教育委員会

は　じ　め　に

柏 原 市 教 育 委 員 会
教 育 長　　三 浦　　誠

昨秋の世界中を襲った金融危機に象徴されるように、昨今の社会情勢には予測不可能な事態が多々あります。このような社会のめまぐるしい変化は子どもの日常生活を変え、子どもの育ち自体にも影響を与えています。このことは、引いては教育の在り方にも影響を及ぼし、様々な課題が山積みになってきています。

その一つが、校種間の連携です。幼稚園・保育所と小学校、小学校と中学校、中学校と高校といった、それぞれの校種間の段差を子どもがスムーズに乗り越えていけるような教育の工夫が求められています。

柏原市では、こうした課題に対して、平成 19 年度に、市内全域を「小中一貫教育特区」として内閣府の認可を受けるとともに、堅上小・中学校は堅上小中一貫校として新しく生まれ変わりました。ここでの取組は、表現力・コミュニケーション力の育成のために、「表現科」「えいご科」の新設や、豊かな自然環境と地域力を活かして、９年間を通したキャリア教育（生き方・体験学習）の実践などです。また、基礎・基本となる確かな学力の定着と向上のために、算数・数学など教科の時数を増やし、小中教員の相互乗り入れを実施しています。このような堅上小中一貫校の成果の上に、次の課題として明らかになってきたのが、就学前教育と義務教育との連携、接続です。

そこで、平成 20 年７月には、就学前の教育と小学校教育をつなぎ、さらに中学校教育にもつないでいくために、幼・小・中一貫教育検討委員会を立ち上げました。この委員会は、堅上小中一貫教育の推進にご尽力いただいた奈良教育大学　小柳和喜雄教授を委員長とし、さらに幼児教育を専門とされる奈良教育大学　横山真貴子准教授のご示唆をいただきながら議論を重ねてまいりました。

そこでの議論をもとに、幼児期と小学校入学直後の時期、つまり４歳から小学校１年生の子どもに育みたい力をまとめたものとして、新しい幼稚園カリキュラムの作成を横山准教授にお願いいたしました。こうしてできあがったものが、―生活とまなびの幼小カリキュラム―**「あんじょう」**です。

柏原市がめざす「15 の春にひとすじの意志をもったひたむきな姿勢をつらぬく若者の育成」（『かしわらっ子』はぐくみ憲章より）のためには、乳幼児期からの子どもの育ちと学びを考えていくことが必要不可欠であり、今後、この**「あんじょう」**を幼児教育の１つの指針として、実践していきたいと考えております。

終わりになりましたが、奈良教育大学の小柳教授、横山准教授には心より感謝の意を表します。

目　次

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

１．いま，なぜ幼小接続か？　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
（１）全国的な動向　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
（２）柏原市の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

２．生活とまなびの幼小カリキュラム「あんじょう」　・・・・・・・・・・・・・・・・　9
（１）カリキュラムの概要について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
（２）生活プラン　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３
・基本的生活習慣　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１５
・コミュニケーション　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１７
・道徳性　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１９
（３）まなびプラン　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２１
・ことば　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２１
・か　ず　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２３
・せいかつ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２５
・からだ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２９
・表　現　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３３

３．実践事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３７
（１）事例の見方について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３７
（２）生活プラン　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３８
（３）まなびプラン　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４０

おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４４

１．いま，なぜ幼小接続か？

（１）全国的な動向

今を生きる子どもたちが抱える課題の１つに、学校間の学びの段差があります。「小１プロブレム」「中１ギャップ」など、学校生活に支障をきたす子どもたちの姿が全国的に大きな問題となっています。例えば、幼稚園・保育所から小学校への入学時には、「人間関係」「環境」「かかわり」「学び」「方法」「評価」の段差[1)]があるとされ、「先生の話を聞けない」、「45 分間椅子に座っていられない」、「友達と一緒の行動がとれない」といった子どもたちの様子が「小１プロブレム」として報告されています。一方で、PISA の結果から火がついた学力低下論は、特に幼児期からの学力向上を求める強い社会的要請を生みました。

こうした状況のもと、昨年３月に改訂された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「小学校学習指導要領」では、幼保小の連携が強く求められています。幼保と小の「段差」をなめらかに「接続」し、子どもの育ちと学びをつなぐこと、そして子どもの発達を促し、学力を向上させること、これが、わが国の喫緊の課題の１つとなっているのです。

●小中連携・一貫教育

幼保小連携に先立ち、まず同じ義務教育である小学校と中学校の連携が進められてきました。地方分権の動きとも相まって、学校・家庭・地域が連携し、地域の子どもは地域で育てようという大きなうねりが起きています[1)]。

例えば、広島県呉市の市立五番町小学校・二河小学校・二河中学校では、「心身の発達の変化」、「学力形成の特質」、「生徒指導上の諸課題の顕在化」の３点を理由に、「４－３－２」の３区分のカリキュラムを開発しています[2)]。東京都品川区では平成 18 年度４月から、同じ３区分で、区内の全小中学校で小中一貫教育を進めています[3)]。このように、義務教育の９年間をひとまとまりとして捉えた上で、地域の子どもの実態に即して教育課程を再編成していく動きが見られます。

●幼小連携・接続

幼稚園と小学校の連携の先駆けは、平成 11～13 年度に文部省の研究開発指定を受けた東京都中央区立有馬幼稚園と小学校の取組[4)]です（指定は幼稚園のみ）。有馬幼稚園では、地域を「ありまフィールド」と名づけ、「くらし・社会・文化」の観点から園の教育課程を再編しています。プロジェクト型活動（あらかじめ学ぶ内容や順序が決められたプログラムではなく、子どもの活動から発展していくプロジェクトを重視した活動）を軸に、幼小の交流活動を展開し、９年間の連続性をふまえた教育課程を編成しています。

幼小の接続を意識し、小学校低学年のカリキュラムを再編したところもあります。鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園・附属小学校では、幼稚園における遊びを小学校以降の

教科の窓口から整理し、子どもの学びの連続性を確かめた上で、附属小学校独自の「段階的分化型カリキュラム」を作成しています。特に、１年生の学習は教科の枠を取り外し、活動や体験を多く取り入れた「生活学習」を位置づけています[5)]。岡山大学附属小学校でも、幼児教育と１年生との接続期の教育を「かけはし学習」と設定し直し、幼児教育が育ててきた「気づき」を引き継ぎ、発展させることをねらいとしています[6)]。

近年では、地方自治体の教育委員会等が中心となって、幼小連携を進める取組も増えてきました。例えば、山口県では、平成 16 年に幼保・小一貫指導の指針となる指導資料「つながる子どもの育ち」を策定し、幼児期から小学校低学年にかけて各段階に応じて育てたい力を４つの視点から 27 の具体例で提示し、冊子にまとめています[7)]。また、佐賀市教育委員会では、平成 18 年度に幼保小連携教育の接続プログラムとして、プレスタディ「えがお」（幼稚園・保育園編）、ソフトプログラム「わくわく」（小学校編）を作成しています。佐賀市では、毎年、プログラムを活用した保育者・教師にアンケートをとり、その意見を生かした改訂を重ねています[8)]。その他、多久市教育委員会（佐賀県）の「『たくっ子』プログラム」（平成 18 年度）[9)] など、地域の実情に応じて、多くの取組が展開しています。

●幼小中連携・一貫教育

幼小と小中、２つの学校種の接続面での連続を別々につなぐだけではなく、さらに先進的な取組として、旧国立大学の附属校園を中心に、幼小中の 12 年間の学びの連続が検討されています。大学の附属であり 12 年間の見通しが立てやすいことに加え、附属校園の存在意義をかけて、複数の校園で取組が進行中です。例えば、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校では、「接続期」という概念を初めて打ち出し、カリキュラムを再編してきました。幼小であれば５歳児 10 月～小学校１年の７月を「接続期」とし、学びの内容（カリキュラム）だけではなく、学びの方法においても、小学校での時間の区切りや教室の空間利用など、工夫を重ねています[10)]。

地域の公立校園においても、小中連携の取組の成果を基盤に、幼児期からの学びを連続させ、幼小中の一貫教育を築いていこうとする試みが生まれてきました。区内全域で小中一貫教育を行っている東京都品川区では、保育所も加えた幼保小一貫教育を平成 22 年度から部分的に実施し、23 年度からは区内全校での実施を目指すとしています（朝日新聞 平成 21 年 3 月 26 日版）。柏原市が平成 20 年度に目指した幼・小・中一貫教育の取組も、こうした取組の１つです。

●なぜ、幼小接続か？

では、具体的にはどのように幼小中の連携を進めていけばよいのでしょうか。２校種間の連携であっても、その教育内容と方法の違い、文化や価値観の相違から連携が難しいことは、どの取組例の報告においても指摘されています。それゆえ、最初から３校種（保を含

めた４校種）を一堂に会しての連携は、ますます困難であることは容易に予想されます。そこで、まずは幼小、小中など隣接する２校種間で接点をもち、連携を築きながら、中学校卒業までの学びをつなげていくことが現実的であるといえます。先述の品川区も、小中一貫教育の達成後、幼保小の一貫教育を目指し、最終的に幼保小中の一貫教育を進めていこうとしています。

柏原市では、平成 19 年度、小中連携を進め、小学校と中学校の一貫教育に着手し、大きな成果をあげました。平成 20 年度は、もう１つの接続面であるである幼小で連携を築くときです。その上で、今後、この２つの接点を足がかりとして、「15 の春にひとすじの意志をもったひたむきな姿勢をつらぬく若者」(「『かしわらっ子』はぐくみ憲章, 平成 20 年６月制定」)を育むために、２つの連携を連続させ、中学校卒業までの一貫したカリキュラムを作成することが求められます。

１つひとつ課題をのりこえ、一歩一歩丁寧に歩みを進めていくことが、15 歳の春を輝かせることにつながると信じています。

（引用文献）

1）小柳和喜雄　(2008)　幼小中連携・一貫教育を考える　第１回柏原市幼・小・中一貫教育検討委員会配付資料（2008 年７月 18 日）

2）天笠 茂監修・広島県呉市立五番町小学校・二河小学校・二河中学校　(2005)　公立小中で創る一貫教育：４・３・２のカリキュラムが拓く新しい学び　ぎょうせい

3）品川区教育委員会　(2005)　品川区小中一貫教育要領　講談社

4）有馬幼稚園・小学校・秋田喜代美　(2002)　幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例　小学館

5）佐々木宏子・鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園　(2004)　なめらかな幼小の連携教育：その実践とモデルカリキュラム　チャイルド本社

6）岡山大学教育学部附属小学校　かけはし学習研究会　(2006)　学校が大好きな１年生をめざして：幼児教育と１年生との接続期の教育　その理論と実践　東洋館出版社

7）山口県 幼・保・小連携推進協議会　(2004)　つながる子どもの育ち：幼保・小一貫指導をめざして

8）佐賀市教育委員会・幼保小の接続を考える会　(2009)　平成 21 年度版　えがお（幼稚園・保育園編）、わくわく（小学校編）

9）多久市教育委員会　(2008)　たくっ子プログラム：就学前教育と小学校教育の適切な接続のために

10）お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校，子ども発達研究センター（2008）「接続期」をつくる：幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働　東洋館出版社

（２）柏原市の課題

幼小接続を検討するにあたって、まず平成 20 年 10 月に、柏原市内の公立幼稚園（７園）と小学校（10 校）に、以下の３点についてアンケート調査を行いました。幼稚園は園長先生、小学校は１年生担当教諭に記入をお願いしました。

①小学校入学間もない児童が、学校生活で戸惑いを感じることについて（幼稚園は、予想される段差や困難として回答）（幼稚園は自由記述・小学校は項目選択）
②幼稚園での配慮事項と小学校での課題について（自由記述）
③幼小連携において効果をあげると思う取組について（自由記述）

アンケートを集計した結果、いずれの項目においても、幼小の教員の間に認識のずれが見られました。次に、それぞれの項目について、結果を見ていきます。

●入学間もない児童の学校生活上の戸惑いについて

①の結果をまとめたものが図１です。図１にあるように、小学校教員は児童が学校生活で戸惑いを感じることとして、「チャイムで区切られた時間の流れ」や「一斉指導」、「45 分間、座って授業を受けること」といった**教育方法**の違いを多く挙げています。また、「トイレ環境」や「自分の持ち物の管理」、「学校・学級のルール」といった**生活習慣**についても、困難さを多く感じていました。一方、幼稚園教員では、選択項目以外の「その他」が最も多く、その内容を見ると「教科学習について」といった**学習面**と「**給食**」が多く挙げられていました。

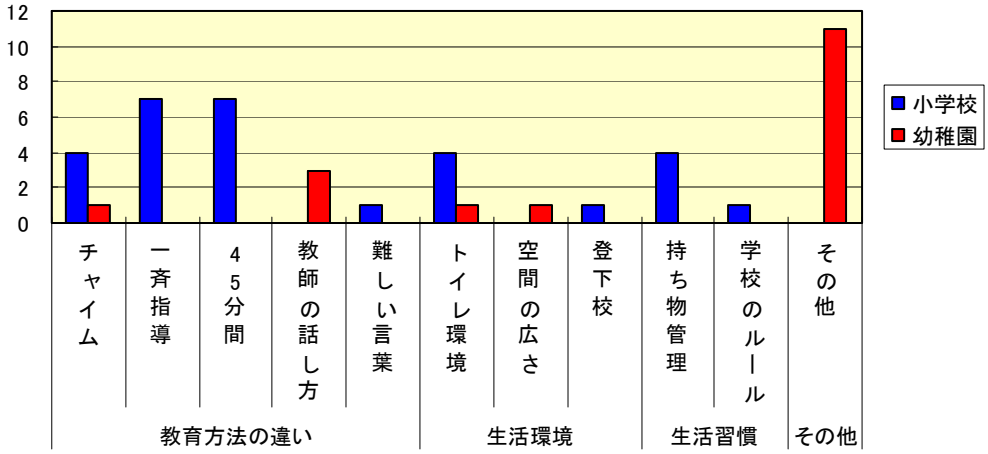


図１　小学校入学間もない児童が、学校生活で戸惑いを感じることについて

●幼稚園での配慮事項と小学校での課題について

②の結果から、幼稚園で特に配慮している内容が小学校では課題となっていると教員が捉えていることが明らかになりました。特に、生活面での内容の捉えの違いが大きく、「基本的生活習慣の確立」や「人の話を集中して聞けるようになる」といった内容を幼稚園では特に配慮していると答えているのに対し、小学校では「持ち物の整理整頓」や「人の話を聞く態度」「話を集中して聞くことができない」といった点が適応上の課題だと捉えていました。

なぜ、こうした捉えの違いが生まれるのでしょうか？　幼稚園の時にはできていた子どもが、小学校に入学した途端にできなくなってしまったのでしょうか？　だとしたら、できなくなった理由（段差）は何なのでしょうか？　あるいは、そもそも幼稚園にいる時から、できていなかったのでしょうか？

もちろん、子どもは環境によって見せる姿が異なります。幼稚園ではしっかり者のお姉さんタイプの女の子も、家庭では甘えん坊の妹ということもよくあります。しかし、環境が変わったとしてもその子どもの中に育てておきたい力は変わらないはずです。

委員会の議論（第３回）においても、各発達段階における子どもの育ちの目標とその達成のための具体的な支援（指導）を把握することが必要だという結論に至りました。また、そのためには、幼小の接続期の子どもの姿を、幼稚園のときの姿、小学校に入った後の姿と分断して見るのではなく、発達の見通しをもって連続的に捉えることが重要である、ということが確認されました。

●幼小連携において効果をあげると思う取組について

③の幼小連携における効果的な取組として、幼稚園、小学校からの共通の提案は、「教員同士の相互理解と協力関係を深める」「卒園・入学前の交流」「お互いの保育・授業参観」「校区ごとの交流」などでした。これらに加えて、幼稚園からは「日常的な交流」「相互の教育課程・指導方法・教育のねらいなどを理解する」といった具体的な相互理解のあり方や、「教育課程の見直し」「学校体制での連携の確立」「合同研修」などがあげられ、「幼稚園のことを知ってほしい」という記載も見られました。幼稚園教員からの提案が数も多く、内容も具体的なものが出されました。

連携においては、子どもの年齢の低い学校種の方が積極的だという報告が多く見られます。また、幼稚園で行われている教育（遊びを通した総合的な学び）は、小学校以降の教師には理解しづらいとよく言われます。そうした中、先入観を持たず、白紙の状態で子どもを受け入れたい、といった小学校の教師の声もよく耳にします。

しかし、子どもの学びに連続性をもたせるためには、また現在では特別支援教育の観点からも、幼保での子どもの姿をしっかりと把握した上で、小学校教育を進めていくことが求められています。

以上の観点から、柏原市の幼小接続では、まずはお互いを知ることが必要だと考えられました。お互いを知るために、まず幼稚園、小学校それぞれでの子どもの育ちや学びの姿、そしてそれぞれの指導方法について、知ることから始めようということになりました。1人ひとりの子どもの発達を幼小で分断するのではなく、連続するものとして捉える。これが、幼小連携の第一歩だと考えたのです。

そこで作成したのが、次の**「生活とまなびの幼小カリキュラム『あんじょう』」**です。

２．生活とまなびの幼小カリキュラム

「あんじょう」

２．生活とまなびの幼小カリキュラム 「あんじょう」

（１）カリキュラムの概要について

●カリキュラムの見方

「生活とまなびの幼小カリキュラム『あんじょう』」（以下、**「あんじょう」**）は、各発達段階における子どもの育ちの目標とその達成のための具体的な支援（指導）を４歳から小学校１年生までの３段階に分けて、記述したプランです。

子どもの育ちの記述は、それぞれの年齢で「ここまで育てなければならない」といった到達目標ではありません。あくまで「こう育てたい」といった目指す方向を示す、方向目標です。子どもの発達には個人差があります。ひとりの子どもの中にも、得意不得意があり、発達にばらつきがあります。ですので、子どもによっては、４歳の目標が５歳で達成されることも、１年生で達成されることもあります。次の年齢段階に、引き継がれていく目標だと捉えて下さい（p. 13，表２参照）。ここでの記述は、子どもが自ら育つ力、可能性を最大限に引き出すための目安です。

●カリキュラムの特徴

「あんじょう」が参考にしたのは、佐賀県多久市教育委員会作成の「たくっ子プログラム」[1)]の『はぐくみステップ』です。『はぐくみステップ』では、「子どもたちにつけたい力」として、基本的習慣の確かな定着を目指し、４歳児～第２学年までの４年齢段階に分けて、目標とその達成のための具体的な手立てを記述しています。これをベースにしながら、**「あんじょう」**では、発達段階における「基本的習慣」の定着を目指す「生活プラン」に加えて、新たに「まなびプラン」も作成しました。

なお年齢枠は、**「あんじょう」**では、幼小連携の第一歩として、柏原市の公立校園での幼小接続期を意識し、幼稚園入園の４歳児～第１学年までの３年齢段階としています。ただし、３歳児保育を実施している私立幼稚園、乳児からの保育を行っている公立・私立保育所においても、就学を控えた接続期の４、５歳の子どもたちの姿には共通する部分が多いと思います。全ての子どもたちは、この時期をくぐって、小学校１年生へと育っていきます。**「あんじょう」**をたたき台として、よりよい幼小接続期プランを作成していただくとともに、今後は幼保小中連携に向け、年齢幅を広げたプランへの発展を期待しています。

●生活プラン（別表１～３）について

「あんじょう」の「生活プラン」は、「基本的生活習慣」「コミュニケーション」「道徳性」の３つの柱から編成されています（参考：「たくっ子」では「基本的生活」「コミュニケーション」「セルフコントロール」の３つ）。「たくっ子」を参考にはしていますが、具体的な項目は「柏原市立幼稚園教育評価規準」（平成 17 年３月）[2)]をもとに作成しています。

３つの柱の下位項目を表１に示しました。

表１　生活プラン

基本的生活習慣	**・衣服の着脱**（着脱，調節，選択） **・排泄**（トイレの利用，トイレ利用のタイミング） **・食事**（量，マナー，はしの持ち方） **・衛生**（手洗い・うがい・はみがき，着替え） **・片づけ**（自己管理，共有）
コミュニケーション	**・あいさつ・返事** **・聞く**（聞く態度） **・話す**（自らの表現，相手への表現） **・かかわる**（友達同士，集団）
道 徳 性	**・自己抑制**（決まりを守る，善悪の判断） **・協調性**（集団の中の役割，協力，思いやり）

また、項目及び具体的な支援・指導内容を記述していく際には、「福山市保育カリキュラム」（福山市・福山市保育連盟, 2008）[3)]、「つながる子どもの育ち：幼保・小一貫指導をめざして」（山口県 幼･保･小連携推進協議会, 2004）[4)] を参考にしました。

別表では、いずれの表においても、上段の**ゴシック体**の記述が「子どもの育ちの目標」、下段の明朝体の記述が「具体的な支援・指導内容」となっています。

●まなびプラン（別表４～８）

「まなびプラン」は、幼稚園での学び（領域）と小学校以降の学び（教科）をもとに以下の５つの柱を立て、平成 20 年度に改訂された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「小学校学習指導要領」に基づいて作成しています。

- **ことば**（言葉／国語）
- **かず**（環境／算数）
- **せいかつ**（環境／生活）
- **からだ**（健康／体育）
- **表現**（表現／音楽・図画工作）

「子どもの育ちの目標」の項目は、小学校１年生の「学習指導要領」から立て、これに対応する形で、４歳、５歳の項目を「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」をもとにして作成しました。具体的に記述していく際には、「柏原市立幼稚園教育評価規準」と「福山市保

育カリキュラム」を参考にしました。小学校の項目は、原則として「学習指導要領」の記述を転記し、記述の後に「指導要領」の「２．内容」の番号を記載しました。「指導要領」と対応させることで、幼児期の学びが小学校の教育にどのようにつながっていくのか、はっきりと見えるようにしました。

「達成のための支援」の項目は、４、５歳を中心に詳しく記述しました（「福山市保育カリキュラム」をもとに作成)。小学校につながる幼児期の学びを保育者がどのように援助していくのか、つぶさに描き出すことを目的にしています。

●実践事例

プランのそれぞれが、実際の保育・教育の場では、どのように展開しているのかを示すために、「生活プラン」「まなびプラン」から１項目ずつ取り出し、具体的な実践事例を入れました。

「生活プラン」では、柏原市の課題の１つに挙がっていた生活習慣の「自分の持ち物の管理」を取り上げました（「基本的生活習慣」片づけ)。

「まなびプラン」では、幼小接続の核となる教科である「生活科」に対応する「せいかつ」を取り上げました。特に「自然」とのかかわりに関する４歳児、５歳児の実践を、新潟大学教育人間科学部附属長岡校園の実践事例（新潟大学教育人間科学部附属長岡校園(2007)「科学をつくりあげる学びのデザイン : 学びの壁を越える幼・小・中連携カリキュラム」, 東洋館出版社）[5)] をもとに紹介しています。

幼小の相互理解を図るとともに、幼小接続につながる活動の１つのあり方として、参考にして頂ければと思います。

生活プラン

・基本的生活習慣
・コミュニケーション
・道徳性

表２　「生活プラン」の項目

			４歳児	５歳児	１年生
基本的生活習慣	衣服の着脱	着脱	・自分で服を着たり、靴をはいたりする。		
				・正しく服を着たり、靴をはく。	
					・時間を意識しながら、着替えができる。
			・服のたたみ方を知り、片づける。		
				・脱いだ服をたたみ、片づける。	
		調節	・衣服の調整が必要なことを意識する。		
				・自分なりに、衣服の調節をする。	
					・自分で気づいて、衣服の調整ができる。
		選択	・それぞれの活動に適した服装があることを知る。		
				・活動に適した身支度をする。	
					・状況や目的に応じて、それに適した身支度をする。
	排泄	トイレの利用	・トイレの使い方を知る。		
				・トイレの使い方が身につく（和式トイレも使える）。	
					・小学校のトイレに慣れ、使い方が身につく。
		トイレ利用のタイミング	・活動の変わり目には、トイレに行く。		
				・活動の前には、自分からトイレに行く。	
					・生活のリズムにあわせて（休憩時間に）、トイレに行く。
	食事	量	・苦手な物も少しずつ食べようとする。		
				・一定量を時間内に食べる。	
					・自分にあった量を調節し、決められた時間内に食べる。
		マナー	・食べ終わるまで一定の場所で食べる。		
				・正しい姿勢で座って食べる。	
					・落ち着いた雰囲気で食べる。
		はしの持ち方	・はしを使って食べる。		
				・はしを正しく持って食べる。	
					・はしを正しく持ち、こぼさないで食べる。
	衛生	手洗い・うがい・はみがき	・食前や活動後の手洗いや食後の歯みがきをする。		
				・うがい・手洗い・歯みがきの大切さがわかり、進んで清潔にする。	
					・うがい・手洗い・歯みがきなどをする理由がわかり、必要に応じて体や身の周りを清潔にする。
		着替え	・衣服が汚れたら、自分で着替えようとする。		
				・汗をかいたり、衣服が汚れたら、自分で着替える。	
					・衣服の汚れに気づき、自分から進んで着替える。
	片づけ	自己管理	・自分の持ち物を確認して、片づける。		
				・自分の持ち物を確認して、自分から進んで整理整頓をする。	
					・自分の持ち物を確認し、次に使いやすいように進んで整理整頓をする。
		共　有	・共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。		
				・共同の遊具や用具の準備、片づけをする。	
					・共同の遊具や用具の準備、片づけを進んでする。
コミュニケーション	あいさつ返事		・生活に必要なあいさつや返事ができる。		
				・生活の中で必要なあいさつや返事を知り、はっきり言う。	
					・相手や場に応じたあいさつを知り、進んで言う。
	聞く	聞く態度	・相手の話をすすんで聞こうとする。		
				・相手の話を注意して聞こうとする。	
					・相手の話を注意して最後まで聞く。
	話す	自らの表現	・したり、見たtり、聞いたり、感じたり、考えたりしたことを自分なりの言葉で表現しよう		
				・自分の経験を言葉により適切に表現する。	
					・順序よく話が伝わるように考えて表現する。
		相手への表現	・要求や疑問に思ったことを言葉で伝えようとする。		
				・自分の思いだけを勝手に言ってはならないことに気づく。	
					・聞きたいことを尋ねたり、聞かれたことに答えたりする。
	かかわる	友達同士	・しっかり自己主張をし、友達との衝突や意見の違いを通して、友達の気持ちに気づく。		
				・自己主張もするが、相手の主張も受け入れる。	
					・相手の主張や気持ちを受けとめて接する。
		集団	・集団遊びに興味を持ち、楽しむ。		
				・集団遊びの楽しさを知り、進んで中に入ろうとする。	
					・集団の中で、自分や友達の役割に気づき活動する。

道徳性	自己抑制	決まりを守る	・決まりを守らないと困ることに気づき、守ろうとする。
			決まりの大切さを知り、進んで決まりを守ろうとする。
			・決まりを守る必要性に気づき、場や活動に応じて行動する。
		善悪の判断	・よいことと悪いことの区別をする。
			・よいことと悪いことの区別をし、してはならないことはしないようにする。
			・よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。
	協調性	集団の中の役割	・自分の使った遊具や道具は、自分で片づける。
			・自分の仕事や役割を進んでする。
			・集団の中での仕事や役割に気づきやり遂げる。
		協力	・友達と一緒に活動する楽しさを味わう。
			・友達と共通の目標をもって、活動を進める。
			・友達の性格や特徴がわかり、違いを認めながら仲よくし、助け合う。
		思いやり	・自分より幼い子や高齢者に親しみをもつ。
			・自分より幼い子や高齢者に思いやりの気持ちをもつ。
			・幼い子や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。

別表１　「生活プラン」 基本的生活習慣

			４歳児	５歳児	１年生
基本的生活習慣	衣服の着脱	着　脱	・自分で服を着たり、靴をはいたりする。	・正しく服を着たり、靴をはく。	・時間を意識しながら、着替えができる。
			服の前後・裏表を意識できるよう、見守ったり声をかける。 靴は左右を意識してはけるようにし、生活のいろいろな場面で、左右を意識できるような言葉かけをしていく。	ボタン、スナップなど、正しく留めることができているか、見守ったり、声をかける。 靴は、かかとを踏まずにはくことも含め、正しくはくと、走ったり、跳んだり、動きやすいことに気づかせる。	次の活動に向けて、時間を意識しながら、着替えができるように声かけする。
			・服のたたみ方を知り、片づける。	・脱いだ服をたたみ、片づける。	
			難しそうなところは方法を知らせたり、手伝ったりしながら、「できた」という気持ちがもてるようにする。	丁寧にたたんで片づけておくと、次に着やすいことに気づかせる。	
		調　節	・衣服の調整が必要なことを意識する。	・自分なりに、衣服の調節をする。	・自分で気づいて、衣服の調整ができる。
			会話の中で「暑いね」などと言うことで、気温の変化に気づかせ、衣服の調節を意識づける。	遊びや生活の中で気温・体温の変化を知らせ、衣服の調節をすると心地よいことに気づかせる。	気温や体温に応じて衣服の調節をすることが、健康な生活に欠かせないことを理解させる。
		選　択	・それぞれの活動に適した服装があることを知る。	・活動に適した身支度をする。	・状況や目的に応じて、それに適した身支度をする。
			絵を描く前にはスモックを着るなど、活動に適した服装があることを伝え、着替えさせる。	次の活動を見通し、自分で判断して身支度ができるよう、声かけする。	なぜ、その服装に替えるのか、理由を理解した上で、身支度ができるようにする。
	排泄	トイレの利用	・トイレの使い方を知る。 ・スリッパを履く ・トイレの座り方 ・トイレットペーパーの使い方 ・拭き方 ・水の流し方 ・手を洗う ・スリッパを片づける	・トイレの使い方が身につく（和式トイレも使える）。 ・スリッパに履き替えた上靴を並べておく。 ・汚さないように使う。 ・トイレットペーパーを適切に使う。 ・排泄後、正しく拭く。 ・排泄後、水を流す。 ・排泄後、丁寧に手洗いをする。 ・スリッパを上靴に履き替え、片づける。	・小学校のトイレに慣れ、使い方が身につく。 ・ノックをする。 ・中から鍵をかける。
			ズボンやパンツを全部脱がないと排泄できない子どももいるので、一緒にトイレに行ったり、声かけや手助けするなど、個々に応じた援助をする。	トイレを使った後は、次の人が気持ちよく使うことができるように、水を流したり、スリッパを揃えることなどを伝える。	幼稚園と小学校のトイレでは、大きさも使い方も異なるため、子どもが不安になりやすい。この点に留意し、使い方を丁寧に説明する。
		トイレ利用のタイミング	・活動の変わり目には、トイレに行く。	・活動の前には、自分からトイレに行く。	・生活のリズムにあわせて（休憩時間に）、トイレに行く。
			活動の変わり目には、言葉かけをするとともに、行きたいときに自分からトイレに行けるようにしていく。	次の活動に見通しをもち、自分で判断してトイレに行けるように声かけし、活動の前にはトイレに行くことが習慣づくようにする。	トイレに行っておくとその後の活動が楽しくできることを話すとともに、自分からトイレに行った子どもを捉えて、そのよさをしっかり認める。
	食事	量	・苦手な物も少しずつ食べようとする。	・一定量を時間内に食べる。	・自分にあった量を調節し、決められた時間内に食べる。
			ほめたり、励ましたりして、頑張ろうとする気持ちがもてるようにする。	時間内に食べることができる量を考えて、食べさせる。	自分にあった量を選ばせ、時間を意識しながら食べるように声かけをする。
		マナー	・食べ終わるまで一定の場所で食べる。	・正しい姿勢で座って食べる。	・落ち着いた雰囲気で食べる。
			食事中はきちんと座って食べさせる。食事のマナーや後片づけの大切さを知らせるために、ごっこ遊びや歌遊びを活用する。子どもの様子をよく把握し、個別に指導する。	食べる姿勢に気をつけさせる。食器に手をそえ、食べ物をよせながら食べるようにさせる。	静かな音楽をかけたり、校内放送を聞きながら食べるなど、気持ちが落ち着く雰囲気をつくる。
		はしの持ち方	・はしを使って食べる。	・はしを正しく持って食べる。	・はしを正しく持ち、こぼさないで食べる。
			保育者がモデルを示し、まねをさせる。	はしを使うゲームなどを取り入れて、楽しみながら練習できる活動を取り入れる。	こぼさないで食べる正しいはしの持ち方を指導し、給食時に意識させながら使わせる。
	衛生	手洗い・うがい・はみがき	・食前や活動後の手洗いや食後の歯みがきをする。	・うがい・手洗い・歯みがきの大切さが分かり、進んで清潔にする。	・うがい・手洗い・歯みがきなどをする理由が分かり、必要に応じて体や身の周りを清潔にする。
			洗い場などを使いやすい環境にし、洗い方を具体的にやってみせる。	手洗いや食後の歯みがきをしている子どもをほめ、気づかせる。虫歯にならないためには、食べ物や生活とのかかわりが大切なことを具体的に示す。	正しい手洗いや歯みがきの仕方を学級活動の中で指導し、考えさせる。時間を確保し声かけをこまめにする。
		着替え	・衣服が汚れたら、自分で着替えようとする。	・汗をかいたり、衣服が汚れたら、自分で着替える。	・衣服の汚れに気づき、自分から進んで着替える。
			清潔にすることの気持ちよさや自分でやったという達成感を味わわせながら、自信をもたせる。	汗や泥などで汚れた時は、自分から服を着替えることができるように、継続して声をかける。	健康のために、清潔に保つことを意識させ、汗や泥などで衣服が汚れた時は、自分から進んで服を着替えることができるよう、指導する。
	片づけ	自己管理	・自分の持ち物を確認して、片づける。	・自分の持ち物を確認して、自分から進んで整理整頓をする。	・自分の持ち物を確認し、次に使いやすいように進んで整理整頓をする。
			持ち物が片づけやすいように子どもの動線を考えた環境設定をする。片づける場所が分かりやすいように、名前と一緒に親しみやすいマークを貼る。	整理された友達のロッカーを見せ、整理の仕方を一緒に考える。また、整理することで物の出し入れがしやすくなることに気づかせる。	入学当初は机の中の整理の仕方やランドセルの片づけ方、ロッカーの使い方を中心に指導する。整理ができていると必要な物が確認しやすく、出し入れがしやすいことを、場面を捉えて、こまめに伝えていく。
		共　有	・共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。	・共同の遊具や用具の準備、片づけをする。	・共同の遊具や用具の準備、片づけを進んでする。
			自分の物と共同の物の区別がつくようにさせ、みんなの物は順番・交替で使うことを知らせる。	分類して片づけやすい工夫をするとともに、きれいに片づくと気持ちがよいことを一緒に感じていく。	共同の物はみんなで準備をしたり、片づけることを意識させ、進んでしてくれた子どもを具体的な言葉でほめる。

別表２　「生活プラン」コミュニケーション

			４歳児	５歳児	１年生
コミュニケーション	あいさつ返事		・生活に必要なあいさつや返事ができる。	・生活の中で必要なあいさつや返事を知り、はっきり言う。	・相手や場に応じたあいさつを知り、進んで言う。
			保育者がモデルを示し、まねをさせる。 ままごと、おうちごっこ、お店屋さんごっこ等、あいさつをするごっこ遊びを取り入れる。	場面に応じて自分から言えた時はほめる。 誕生会などの行事の中で、お祝いの言葉や感謝の言葉をみんなに分かるように伝える場を設ける。	教師側から進んであいさつをする。児童が元気よく返すことができたり、自分から進んでできたりした時はほめる。
	聞く	聞く態度	・相手の話をすすんで聞こうとする。	・相手の話を注意して聞こうとする。	・相手の話を注意して最後まで聞く。
			人の話を聞く時は、話す人の顔を見て聞くことを伝える。	話す人の方を向いて、正しい姿勢で静かに耳を傾けるように伝える。	話す人の方を体から向いて聞き、最後まで静かに聞くように指導する。
	話す	自らの表現	・したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりしたことを自分なりの言葉で表現しようとする。	・自分の経験を言葉により適切に表現する。	・順序よく話が伝わるように考えて表現する。
			質問などを通しての自分の思いを言葉で表現する場を設ける。短い言葉で答えられる問いかけをする。	生活発表など、経験したことや考えや思いを相手に分かるように話す活動を取り入れる。	話の順番を考えながら話すように指導する。
		相手への表現	・要求や疑問に思ったことを言葉で伝えようとする。	・自分の思いだけを勝手に言ってはならないことに気づく。	・聞きたいことを尋ねたり、聞かれたことに答えたりする。
			自分の気持ちが話せるように、保育者が言葉を補ったり、仲立ちをしたりする。自分なりの言葉で表現できるようにする。	言葉での表現が難しい子どもには、その子の持っているイメージや言葉を丁寧に聞き、周りの友達に広げていけるように仲立ちをする。 友達と知っていることや考えたことを出し合い、いろいろな意見が聞けるようにしていく。	話す内容や相手をはっきりさせて話をさせる。
	かかわる	友達同士	・しっかり自己主張をし、友達との衝突や意見の違いを通して、友達の気持ちに気づく。	・自己主張もするが、相手の主張も受け入れる。	・相手の主張や気持ちを受けとめて接する。
			かかわりが増えるように、保育者が友達の気持ちを代弁する。	必要に応じて保育者が間に入り、一人ひとりの思いをみんなに伝える。	ペアやグループ活動の前に、相手のやりたいことを尋ねさせる。
		集　団	・集団遊びに興味を持ち、楽しむ。	・集団遊びの楽しさを知り、進んで中に入ろうとする。	・集団の中で、自分や友達の役割に気づき活動する。
			いろいろな集団遊びを知らせ、友達と一緒に活動させる。	発達に応じた集団遊びに取り組ませる。	集団活動の中で自分や友達のよさをみつけさせる。

別表３　「生活プラン」 道徳性

			４歳児	５歳児	１年生
道徳性	自己抑制	決まりを守る	・決まりを守らないと困ることに気づき、守ろうとする。	・決まりの大切さを知り、進んで決まりを守ろうとする。	・決まりを守る必要性に気づき、場や活動に応じて行動する。
			危険なことや命にかかわることは毅然として注意し、守らなければならない決まりに気づかせる。決まりを守って楽しかったこと、守らなくて面白くなかったことに気づかせ、決まりを意識させる。	決まりの必要性を理解した上で、守ろうとする気持ちを持たせる。子どもたちと生活や活動の決まりを話し合い、理解できているか確認する。	学級活動（話し合い活動）で、必要な決まりを決める。子ども自身がそうすることが望ましいと自覚できるように、機会を捉えて解決へ向けて話し合う場を設ける。もめごとやトラブルは話し合いのチャンスとして指導に生かす。
		善悪の判断	・よいこと、悪いことの区別をする。 友達が嫌がったり泣いたりする理由を知り、してはいけないことを感じ取る。	・よいことと悪いことの区別をし、してはならないことはしないようにする。 友達が喜んだり嫌な気持ちになったり、みんなが困ったりする理由を考え、言動がよいことか悪いことかを振り返る。	・よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。 いろいろな場面で、よいことか悪いことかを考え、よいことをしようとしたり、悪いことをしないようにしたりする。
			友達が嫌がったり泣いたりする様子から、たたいたり遊び道具を取ったりすることはいけないことだと気づかせる。	友達に悪いことをした理由や思いを受けとめ、意欲を継続できるように励ました後、行動を振り返させる。嫌な思いをしている友達の気持ちの理由が分かるように伝える。	よい行いをほめたり、紹介したり、見つけたことを認め、よいと思ったことを進んでできるように励ます。
	協調性	集団の中の役割	・自分の使った遊具や道具は、自分で片づける。	・自分の仕事や役割（当番活動）を進んでする。	・集団の中での仕事や役割に気づきやり遂げる。
			次の友達のことを考えて、道具を片づけさせるようにする。	自分たちができる仕事について話し合い、１人ひとりが役割を果たせるように言葉をかける。 当番活動では、仕事の内容が理解できるように、絵や文字に書いて掲示する。	自分の仕事や役割は最後までやり遂げるよう、場面を捉えて声をかけていく。 当番活動では、進んで取り組めるように、当番表や活動内容表を工夫して掲示する。
		協　力	・友達と一緒に活動する楽しさを味わう。	・友達と共通の目標をもって、活動を進める。	・友達の性格や特徴がわかり、違いを認めながら仲よくし、助け合う。
			友達とかかわりがもてるような集団遊びやゲームを取り入れる。保育者や気の合う友達と遊ぶ中で、「やってみよう」という気持ちになれるようにしていく。 遊びや行事を通して、友達とを応援したり、力を合わせることの大切さを伝える。	日常的に友達の頑張る姿や小さな成長、工夫や変化を見つけ、周りの子どもに伝えておく。 お互いに見合ったり、競い合ったりする場面を作る中で、できる・できないだけを評価するのでなく、がんばっている日々の姿に気づかせていく。	いろいろな人（同学年・異学年児童・園児・高齢者等）とふれあう機会を意図的・計画的に設定し、違いや特徴を認めて、相手の立場を考えることができるように支援する。 それぞれの子どものよさに気づく機会をつくり、みんなで力を合わせると大きな力になることに気づかせる。
		思いやり	・自分より幼い子や高齢者に親しみをもつ。	・自分より幼い子や高齢者に思いやりの気持ちをもつ。	・幼い子や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。
			年少の子どもとのかかわりでは、幼い子どもとの接し方を知らせるなど、保育者も共に遊びながら、かかわりを広げていく。 高齢者とのかかわりでは、親しみがもてるように、保育者が積極的にあいさつをしたり、話しかけたりする。	年少の子どもとのかかわりでは、世話をしたい気持ちを大切にしながら、どのようなかかわりがうれしいか、方法や言葉を具体的に伝えながら、年少児の思いに気づけるような言葉かけをしていく。 祖父母と過ごすことのない子が多くなっていることを意識しながら、子どもの様子をみてかかわる。	年少の子どもと自分たちの体格や理解の違いなどを気づき合い、どのようにかかわっていけばよいかを話し合う。実際にかかわり、気づいたことを周りの友達に知らせていく。 相手に喜ばれる接し方を考え、話し合う。

まなびプラン

・ことば
・か　ず
・せいかつ
・からだ
・表　現

別表４　「まなびプラン」 ことば

			4歳児	5歳児	1年生
ことば	話すこと・聞くこと	報告 説明	・自分の思っていることや経験したことを友達や保育者に話す。	・みんなの前で、1つの話題について、思いや経験を話す。	・事物の説明や経験の報告をしたり、それらを聞いて感想を述べたりする((2)ア)。
			子どもの話に相づちをうったり、思いを引き出すような問いかけをし、「話したい」「聞いてもらいたい」という気持ちを大切にする。	話題とする内容が理解されているか、丁寧に確認する。表現できない時やとまどいがあるときには、助言しながら、少しずつ思いを聞いていく。	身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出しながら話すように指導する((1)ア)。
		話し合い	・自分の思いを話したり、友達の思いを聞いたりする。	・友達の話を聞いたり、自分の言葉で思いを話す。	・尋ねたり応答したり、グループで話し合って考えを一つにまとめたりする((2)イ)。
			友達の思いや考えを最後まで聞き、自分の気持ちが話せるように、保育者が言葉を補ったり、仲立ちをしたりする。	友達の思いを理解し、受けとめる気持ちが育つように、保育者が言葉をそえながら話し合わせる。 子どもから意見が出ない場合は、保育者が話の方向性をしっかり持ち、子どもから引き出すように話し合いを進めたり、提案をしていく。	互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うように指導する((1)オ)。
		あいさつ	・生活に必要なあいさつをする。	・場面に応じたあいさつをする。	・場面に合わせてあいさつをしたり、必要なことについて身近な人と連絡をし合ったりする((2)ウ)。
			登降園時・食事のときなど、友達や保育者と一緒にあいさつをするよう心がける。保育者から気持ちをこめたあいさつをする。	「ありがとう」「こんにちは」など、時・場面に応じて言えたことを認めながら、保育者も丁寧に応えていく。	相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気をつけて話すように指導する((1)イ)。
		紹　介		・保育者の話を友達や家族の人に伝える。	・知らせたいことなどについて身近な人に紹介したり、それを聞いたりする((2)エ)。
				複雑な内容にならないように気をつける。家庭への連絡が伝わりにくい子どもの場合には、事前に家庭と連携しておく。子どもが伝えられたことを認める。	
		創　作		・想像したことを言葉で表現する。	・想像したことなどを文章に書く((2)ア)。
				子どものつぶやきを共感をもって聞き、イメージが広がるように子どもの話をつないでいく。	
	文字の機能		・身近にある記号や標識を意識し、その意味が分かる。	・記号や文字の役割（はたらき）が分かる。	書くこと　報告：・経験したことを報告する文章や観察したことを記録する文章などを書く((2)イ)。
			園内めぐりなど、遊びの中で楽しみながら身近にある記号（表示）や標識が理解できるように、意味を知らせていく。	遊びに必要な文字や数字を、身近な言葉と関連づけて知らせる。	
	書くこと	文字への興味や習得の度合いについては、個人差が大きいことを十分理解し、1人ひとりの状態を把握しておく。	・文字に関心をもつ。	・自分の名前を文字で書く。	説明：・身近な事柄を簡単に説明する文章などを書く((2)ウ)。
			身の回りで文字が使われているものに気づかせたり、室内に文字を使った掲示をするなど、文字への関心を高めていく。	1人ひとりの理解には個人差があることを把握した上で、名前表を準備するなどして、書こうとする意欲を高める。書けない子どもには、個別にゆっくりと丁寧にかかわる。	
			・文字に興味をもち、文字を使って遊ぼうとする。	・文字への関心が高まり、遊びの中に取り入れる。	紹介：・紹介したいことをメモにまとめたり、文章に書いたりする((2)エ)。
			文字を正しく、きれいに書くことよりも、「書こう」とする意欲を大切にし、認めていく。	「伝えたい」「書きたい」気持ちを大切にし、文字スタンプを用意するなどして、書きたいときには文字を使った表現ができるようにする。 「ごっこ遊び（お店屋さんごっこ・郵便ごっこなど）」を通して、文字の便利さや使えることの楽しさに気づかせていく。	手紙：・伝えたいことを簡単な手紙に書く((2)オ)。
	読むこと	読　む ・文字を読む ・読書	・身近にある文字に興味をもつ。	・身近にある文字を読もうとする。 ・自分の名前が文字で分かる。 ・ほとんどのひらがなを読める。	
			靴箱やロッカーなどには、見えやすい場所に子どものマークと名前をひらがなで書いておく。用具や遊具を片づける場所には絵と文字を両方標記しておく。	靴箱やロッカーなどには、見えやすい場所に名前をひらがなで正しくはっきりと書く。用具や遊具を片づける場所などにも、文字で標記しておく。	
				・絵本の文字など、読むことを楽しむ。	・本や文章を楽しんだり、想像を広げたしながら読む((2)ア)。
				文字への興味には個人差が大きいことを理解し、子どもが文字に興味をもち、読むことを楽しんでいる場合は、読もうとする姿を見守っていく。	読み聞かせや読書の時間を設けて、読書に親しむ機会を作る。視聴覚機器を活用したり、文章に沿って読み進めたりして、想像力をふくらませるようにする。
		読み聞かせ	・絵本や紙芝居、視聴覚教材を楽しんで見たり、聞いたりし、イメージを広げる。	・昔話や民話など、いろいろなジャンルの絵本に興味をもち、少し長い話も楽しむ。	・物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりする((2)イ)。
			子どもの興味のある内容や親しみやすい内容のものを選び、気持ちをこめて読むことで、おもしろさが感じられるようにする。 生活や遊びの中で好きな絵本を自由に選べる環境を整えておく。	絵本や物語を表現活動に発展させて楽しめるように、1人ひとりの発想を大切にし、イメージが具体的な活動になるよう小道具などを用意しておく。	読み聞かせや読書の時間を設けて、読書に親しむ機会を作る。
		課題解決	・図鑑や科学絵本に親しむ。	・いろいろなジャンルの絵本に興味をもち、科学絵本も楽しむ。図鑑を使って、調べる。	・事物の仕組みなどについて説明した本や文章を読む((2)ウ)。
			図鑑を調べると、虫や動物の生態や栽培・飼育の方法などが分かることを知らせ、活動への期待を高める。いつでも見られるように、図鑑を取り出しやすい場所に置いておく。	「知りたい」「調べてみたい」という思いを大切にし、図鑑などを身近な場所に置いておく。	
		ふりかえり			・物語や科学的なことについて書いた本や文章を読んで、感想を書く((2)エ)。
		紹　介			・読んだ本について、好きなところを紹介する((2)オ)。
					国語の教科書を読んで、おもしろいところや分かったことを発表する。

別表５　「まなびプラン」 かず

			４歳児	５歳児	１年生
か ず	か ず	かぞえる	・数や数字に関心を持つ。 ・1～10までの数を数える。	・遊びの中で数を唱えるなど、数を十分に感じる体験をする。	・ものの個数を数えることなどの活動を通して、数の意味について理解し、数を用いることができるようにする(A(1))。
			数への関心が持てるように、木の実、木の葉などを身近な自然物を数多く準備し、並べたり、数えたりできるようにする。	遊びの中で人数や個数など、自然に数を数えるような機会を多く作る。	・算数や生活の中で、具体物を用いて、実際に数える体験をしながら学ぶ機会を多く作る。算数や生活の中で、100までの数を数えたり使ったりする。
			・数の大小が分かる。	・「多いー少ない」が分かり、使う。	
			生活や遊びの中で、数の大小に子どもたちが発見できるような言葉かけをする。	生活や遊びの中で、保育者が意識して使ったり、数を比べるような声かけをし、興味や関心をもたせていく。	・加法及び減法の意味について理解し、用いることができるようになる(A(2))。
				・対応付けや集合数（何個あるか）、順序数（何番目か）が分かるようになる。	
				生活や遊びの場面、例えば、列に並ぶ時など、自分はどこから何番目などを意識づけるような言葉かけをする。	・具体物を用いて、実際に足したり、引いたりする体験をしながら、学ぶ機会を多く作る。
	量	量	・量やかさに関心をもつ。	・遊びの中で、量やかさを十分に感じる体験をする。	・大きさを比較するなどの活動を通して、量とその測定についての理解の基礎となる経験を豊かにする（B（1））。
			量やかさへの関心が持てるように、豆や木の実など身近な物を数多く準備し、箱やケースに入れて遊べるようにする。	生活や遊びの中で、量と具体物とを関連させながら話す（芋：重い）。	
			・「深いー浅い」「重いー軽い」が分かる。	・「深いー浅い」「重いー軽い」が分かり、使う。	・具体物を用いて、実際に量を計る体験をしながら、学ぶ機会を多く作る。
			生活や遊びの中で、量の違いを子どもたちが発見できるような言葉かけをする。	保育者が意識して言葉を使ったり、量を意識し、比べるような声かけをする。	
		時　間	・昨日・今日・明日が分かる。	・昨日・今日・明日・明後日の時間の流れが分かる。	
			生活や遊びの中で、時間の流れを捉えることができるようにする（「昨日はお休みだったね」など）。	楽しい活動や遊びの継続の中で、昨日と今日、今日と明日、明日と明後日の関連づけをはっきりさせていく。遊びの計画や行事などをカレンダーを使って知らせる。 生活への見通しが持てるように、保育者が生活の中で意識して使っていく。	
				・今日の月日や曜日が分かる。	
				生活の中で、月日、曜日に関心がもてるように、保育者が意識して使ったり、カレンダーを掲示したりする。	
				・時間と生活とのかかわりを知る。およその時間が分かる。	・日常生活の中で時刻を読むことができるようにする(B(2))。
				具体的な生活と時計を見合わせて、時間とのかかわりに気づくようにする。また、時計作りなどを通して、時間・数字に関心が持てるようにする。	
	かたち		・形に興味をもつ。 ・形の違いが分かる。	・形の違いが分かり、形の名前が言える。	・身の回りにあるものの形について観察や構成などの活動を通して、図形についての理解の基礎となる経験を豊かにする（C(1))。
			形に関心が持てたり、形のおもしろさに気づけるような遊びを工夫する。同じものを見つけたり、集めたりしながら、形の違いに気づくようにする。	形の名前を保育者が生活や遊びの中で、意識して使っていく。遊びの中で、形を合わせたり、離したりすることによって形が変化していくことに自然に気づかせるようにする。	

別表６　「まなびプラン」 せいかつ

			4歳児	5歳児	1年生
せいかつ	かんきょう	園・学校生活	・園生活の様子が分かり、保育者や友達と一緒に活動することを楽しむ。	・園生活の決まりを守りながら、友達と共通の目標をもって行事や活動を進める。	・学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり、楽しく安心して遊びや生活ができる（2(1)）。
			保育者との安定した生活の中で、安心して自分の気持ちや思いを表し、友達の気持ちが考えられるようにしていく。	お互いの違いを知って1人ひとりが力を発揮し、みんなでやりきった達成感を味わえるようにし、仲間意識が育つようにする。	「にんじゃになって　がっこうたんけん」など、楽しみながら、学校について知ることができるよう工夫する。
				・園内や園外の危険な場所を知り、気をつける。	・通学路の様子やその安全を守っている人々などに関心をもち、安全な登下校ができるようにする。（2(1)）。
				保育者と一緒に歩いて、どこが危険かを考え合う（段差がある、暗いなど）。	
		家庭生活	・健康に過ごすための生活の仕方が分かるようになる。	・健康に関心をもち、生活に必要な基本的な習慣が身につく。	・規則正しく健康に気をつけて生活することができる（2(2)）。
			保育者が率先してモデルを見せ、習慣となるように繰り返し声をかける。	生活リズム、食事、清潔などの習慣が身についているか、意識して見ていく。	
					・家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たす（2(2)）。
		地域社会	・身近で働く人たちの仕事や生活に興味関心をもつ。	・身近な人を通して、働くことと自分とのつながりに気づく。	
			身近な自分たちの生活にかかわって、いろいろな仕事をしている人たちがいることを知らせ、感謝の気持ちがもてるようにする（「勤労感謝の日」）。	身近な人の仕事を知り、働くことの意味や自分とのつながりについて子どもと一緒に考え、大人へのあこがれや感謝の気持ちが育つようにする。 家の中で自分にできる仕事は何か考える場面を作る。	・自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活することができる（2(3)）。
		公共物・施設	・身近な公共施設を知る。	・公共施設や公共物を大切にする。	・公共物や公共施設を利用し、身の回りにはみんなで使う物があることやそれを支えている人々がいることなどが分かり、それらを大切にし、安全に気をつけて正しく利用することができる（2(4)）。
			公共の場所での遊び方、人との交流など、気持ちよく利用できる方法について、気づくような言葉かけをする（「みんなで使う場所だから大事に使おうね」）。	公共の物を利用するときの約束を知らせ、自分たちはどんなことに気をつけたらよいのか、話し合う機会をもつ。	
	いのち・かかわり	自然観察	・自然の事象に興味・関心をもち、親しむ。	・自然の事象の不思議にふれ、発見の喜びや試したり確かめたりすることを楽しむ。	・身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりなどして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに気づき、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできる（2(5)）。
			戸外遊びや散歩にでかけ、空の色や風、気温、草花、虫などに対する子どもの発見や気づきに共感し、関心が持てるようにする。	その日の天候（雪・氷など）を機会を逃さず、活動に取り入れる。空や風、気温など、保育者が気づかせたいことをその時々に伝えていく。子どもの発見や驚きは逃さず受けとめ、保育者が共に感動する。	生活科や各教科の中で、子どもが五感を通して自然とふれあう時間を保障する。
			土、砂、水などにふれて遊び、それらの感触や心地よさを味わう。	土、砂、水などのおもしろさ、不思議さ（変化や性質）に気づく。	子どもたちが五感を通して感じたことを価値づけたり、言葉などで意識づけし、感じたことを大切にする。
			思う存分遊べるようにいろいろな用具を準備し、後始末や着替えなども楽しくできるよう、配慮する。 保育者は子どもと一緒に遊ぶ過程で、土や砂の感触の心地よさを意識づけたり、子どもの気持ち（喜び・楽しさ・驚き）に共感したりする。	砂場で水を使って遊ぶなど、水が砂を削ったり、しみこんでいく様子から、水や砂の性質に気づけるようにする。	
		行事活動	・日本の伝統的な行事を知る（お正月、ひなまつり、こどもの日、七夕、お月見、もちつきなど）。 ・行事に楽しんで参加する。	・行事や祝祭日の意味を知り、興味をもって参加する。 ・地域の行事に参加することを通して、地域の一員であることを認識する。	
			子どもが行事について知っていることを引き出していく。行事の意味を分かりやすく知らせ、保育者と友だちと楽しんで参加できるようにする。	行事の意味やねらいを伝え、進んで参加したり、楽しめるようにする。地域の敬老会や文化祭に参加することを通して、地域の人の営みを知り、自分も地域社会の一員であることが感じ取れるようにする。	
		自然利用・工夫	・いろいろな自然物を使い、作って遊んだり飾ったりする。	・自然物を使って、さまざまな遊びを工夫する。	・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気づき、みんなで遊びを楽しむ(2(6))。
			戸外遊びや散歩などで、自然物を集め、使いやすいように分類しておく。	拾った自然物を自由に使って遊べる環境を整える。自然物を活用し、言葉やイメージを豊かにしたり、数への意識を高めたりする。	
		飼育・栽培	・虫や小動物にふれたり、植物の生長に関心をもって、世話をする。	・動植物にふれたり、世話をしたりして、成長を期待する。	・動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、またそれらは生命をもっていることや成長していることに気づき、生き物への親しみをもち、大切にすることができる（2(7)）。
			虫や小動物にも命があることを知らせ、優しくふれたり、観察できるようにする。 植物の生長には水・土・太陽が必要なことを知らせ、必要に応じて一緒に水やりをする。	見たりふれたりできる飼育箱に入れ、保育者が一緒に世話をする。えさの与え方や水の替え方など図鑑などで調べ、成長に期待をもつようにする。 水やりを当番活動として位置づけるなど、保育者とともにやりとげるようとする意欲をもたせる。 保育者が大切に扱い、命の大切さや世話の大切さに気づかせる。	最初ははりきっていても、次第に飽きてしまう子も出てくるので、子どもたちが栽培への関心を持ち続けられるようにする。 校内外で、多くの虫や動物に出会い、その姿を観察したり表現する中から、「自分たちも生き物を育ててみたい」という思いが自然に生まれてくるようにする。

			●虫や小動物の飼育 ・虫：ダンゴムシ、テントウムシ、チョウチョ、おたまじゃくし、カエル、ザリガニ、カブトムシ、クワガタ、カマキリ、バッタ、トンボ、カミキリムシ、カタツムリ、コオロギ　など ・小動物：ウサギ、カメ、インコ、セキセイインコ　など ●植物の栽培 ・種まき：アサガオ、ヒマワリ、フウセンカズラ　など　・水栽培：クロッカス、ヒヤシンス　など ・球根植え：チューリップ、スイセン、アネモネ　など ・苗植え：キュウリ、トマト、ナス、ピーマン、オクラ、シシトウ、ゴーヤ、レタス（夏野菜）、イチゴ、スイカ、ダイコン、タマネギ、キクナ、エンドウ豆、ソラ豆　など ・芋：サツマイモ、ジャガイモ		
		身近な人との交流	・身近な人や地域の人とのふれあいを楽しむ。	・地域の人との交流を楽しむ。	・自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽しさが分かり、進んで交流することができる（2(8)）。
			祖父母や地域の人と一緒に過ごす時間を楽しみにできるようにする。	楽しく交流ができるように、交流の目的を話したり、どのように接したらよいか話し合う。	
	じぶん	自分の成長	・誕生日のお祝いをする。	・自分や友達の誕生月・日に関心をもつ。	・自分自身の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができる（2(9)）。
			自分の誕生日を心待ちにしたり、友達の誕生日を一緒に喜び合えるような雰囲気をつくる。	誕生表を作り、自分や友達の誕生日に期待がもてるようにする。生まれたことに喜びを感じられるような保育の工夫をする（赤ちゃんの時の話を聞く）。	
			・進級時には、1年の成長を喜び、進級への期待をもつ。	・卒園前には、1年間の成長を実感し、周りの人に対して感謝の気持ちをもつ。 入学への期待をもつ。	
			体の成長やできるようになったことを具体的に話したり、1年間過ごした保育室や遊具・用具などをみんなで掃除をすることを通して、年長になる喜びがもてるようにする。	春からの記録や製作を見せ合ったり、「大きくなった」と成長が実感できるように、日々の生活を工夫する。 思い出を語り合い、一緒に遊んだ友達や家族、まわりの人に対して感謝の気持ちを言葉で表現する機会をもつ。	
				・入学への期待をもつ。	
				小学校見学や交流会を経験したり、学校でどんなことを勉強するのか、したいのかなどを話し合い、入学への期待がもてるようにする。	

別表７　「まなびプラン」 からだ

			4歳児	5歳児	1年生	
から だ	からだづくり		・いろいろな遊びの中で、十分に体を動かす。 追いかけっこをして広い場所をたっぷりと走り回ったり、「ぴょんぴょん」うさぎになって両足跳びをするなど、全身を動かす遊びを工夫し、体を動かす楽しさや心地よさが味わえるようにする。 保育者自身が楽しんで体を動かしたり、年長児と交流する中で、楽しさを伝え、まねてやってみたい気持ちが持てるようにする。	・いろいろな運動遊びに力いっぱい取り組んだり、自分なりの目的をもって挑戦したりする。 積極的に取り組んでいる姿を認め、自信や意欲がもてるようにする。 友達のがんばっている姿を伝え、互いに認め合えるようにする。	・体を動かす楽しさや心地よさを味わうとともに、体の基本的な動きができるようにする(A(1))。 ・運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動をしたり、場の安全に気をつけたりすることができる(A(2)). ・体つくりのための簡単な運動の行い方を工夫できる(A(3))。	
	器械・器具をつかっての運動遊び	固定施設	・ブランコ遊びを楽しむ。 戸外の固定遊具は、遊び方について、1つひとつ確認し、安全に遊べるようにする。 ブランコを持つ手の位置（肩の高さ）を知らせながら、揺れを楽しむ姿に共感していく。 自分でこぎにくいときは、揺れを楽しめるように背中を押しながら歌を歌ったり、言葉をかけたりする。 交替して遊べるように、約束を話し合う。	・ブランコで立ちこぎをする。 肩の高さ位で持つと、こぎやすく安全なことを知らせる。	器械・器具を使った運動を楽しく行う。	・固定施設を使った運動遊びでは、上り下りや懸垂移行、渡り歩きや跳び下りができる(B(1)ｱ)。
			・うんていで遊ぶ。 親指を下からもって握るように伝える。 ぶら下がれない子どもには、体を支えて補助する。慣れてきたら少しずつ力を緩め、自分でできた達成感や満足感が感じられるようにする。	・うんていを渡る。 渡れない子どもには、手を前に運びやすいように、背中に手を添えてリズムをとり、軽く前に押す。		
			・登り棒で遊ぶ。 危険がないよう、棒をしっかり握ることを知らせる。 すべり降りるときは、保育者が下で、足を支えられるように体勢をつくっておき、安心してすべれるようにする。 登れるように、足をもってタイミングよく押し上げていくなど、個々に合わせた補助をする。	・登り棒を登る。 1人で登れない子どもには、保育者が支えて登れるようにする。 テープで印をつけ、目標をもって登れるようにする。 頑張っている姿を周りの子どもに知らせ、友達を応援したり、されたりする中で意欲をもつようにする。		
		マット	・マットを使った遊びのおもしろさを味わう。 マットの横転では、転がるイメージの持てる言葉かけをし、体が横転しやすいように補助し、回れた喜びを感じられるようにする。	・マットを使って基本的な動きができる。 マットの前転では、保育者がして見せたり、安心してできるように補助をする。		・マットを使った運動遊びでは、いろいろな方向への転がり、手で支えての体の保持や回転ができる(C(1)ｲ)。
		鉄棒	・鉄棒に飛び上がり、腹支持をする。 必要な子には腰の所へ手を添え、「1，2，3」とリズムをつけて、足で地面をしっかり蹴って跳びつくことを繰り返し挑戦させる。 腕を伸ばして体を支えることで、前回りができるようになることを伝え、期待がもてるようにする。	・鉄棒で前回りをする。 鉄棒の持ち方や地面を勢いよく蹴っておしりを上げることを知らせる。体の力をぬいて回れるように、側について繰り返し補助する。		・鉄棒を使った運動遊びでは、支持しての上がり下がり、ぶら下がりや易しい回転をすることが(B(1)ｳ)。
		跳び箱	・跳び箱で馬乗り遊びをする。 両手を着く位置や踏み切りの位置に印をする。 思いきって跳び乗れるように繰り返し援助し、できた喜びが味わえるようにする。	・跳び箱を跳ぶ。 ・馬乗り→開脚で跳び乗る→開脚跳び→助走をつけて開脚跳び 1人ひとりの状態を見て、目標を設定し、達成感が味わえるようにする。 友達のやり方を見合う機会をつくったり、跳ぶための具体的な助言をする。できた時は一緒に喜び、友達同士で認め合うようにする。		・跳び箱を使った運動遊びでは、跳び乗りや跳び下り、手を着いてまたぎ乗りや跳び乗りができる(C(1)ｴ)。
		平均台	・平均台で遊ぶ。 「橋を渡ってみよう」などごっこ遊びにし、楽しみながら平均台の上を歩けるようにする。横歩から始める。	・平均台を渡る。 落ちないようにバランスをとって歩いている姿を認める。平均台の上でジャンケンをするなど、遊びに取り入れ楽しんで歩けるようにする。		
		縄跳び	・縄跳びをする（短縄）。 手首がうまく回せるように片手に縄を持ち、保育者と一緒に、体の横で〇を描くようにまわしてみる。 友達同士で数え合い、目標をもってできるようにする。	・短縄で前跳びをする。 縄跳びカードなどを作り、目標をもって楽しく取り組めるようにする。 回数を多く跳ぶことにも挑戦するように、持続して跳んでいる友達を応援し、友達同士数え合うようにする。		
			・保育者が回した長縄を跳ぶ。 跳ぶ子どもに合わせて、スピードをコントロールしながら回す。 入る時や出る時は、タイミングが取りやすいように「はい」などと声をかける。	・長縄跳びをする。 1人ひとりのリズムに合わせて、縄を回すようにする。 「縄を回したい」という思いを受けとめ、子どもと保育者で回すようにするなど、持続して縄跳びが楽しめるようにする。 跳んだら出て間を空けないように次々と入り、途切れないように続ける楽しさをみんなで味わう。		・運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動をしたり、場の安全に気をつけたりすることができる(B(2)). ・器械・器具を用いた簡単な遊び方を工夫できる(B(3))。
	はしる・とぶ	はしる	・全力で走る。 友達同士応援し合ったり、友達のよいところに気づくような声かけ（「手をよくふってるね」など）をする。	・自分の力を出し切って走る。 腕を振り、腿を挙げて走ることを経験し、速度の違いに気づくようにする。 カーブの曲がり方など、友達のよいところに気づき合い、リレーなど、どうしたらチームの力が出せるか考え合う場をもつ。	走・跳の運動を楽しく行う。	・いろいろな方向に走ったり、低い障害物を走り越えたりできる(C(1)ｱ)。
		と ぶ	・その場で跳び上がって的（タンブリンなど）をたたく。 両足でしっかり踏み込んで跳び上がることを知らせる。 個々に応じて高さを調節し、少しずつ高くしていくことで、できた満足感を味わえるようにする。			・前方や上方に跳んだり、連続して跳んだりできる(C(1)ｲ)。

						・運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたり、場の安全に気をつけたりすることができる（C(2)).
						・走ったり跳んだりする簡単な遊び方を工夫できる(C(3))。
	水遊び		・プール遊びをし、水に親しむ。 しぶきをあげて歩く、ジョウロ、霧吹きなどで頭や顔に水をかけて遊ぶなど、楽しんで水に慣れるようにする。 全身を使って開放感が味わえるように、子どもが安心して遊べる水量から始める。 個人差が大きいので、水に対する恐怖心をもっている子どもには、緊張感がなくなるように、個々に合った遊びを工夫する。 1人ひとりのがんばりを認める言葉かけをしたり、友達から応援してもらったりする経験を通して、自信が持てるようにする。	・プール遊びを楽しむ。 個人差があるので、1人ひとりに合わせた目標を設定し、進めていく。子どもたちが達成感を味わえるようにする。 友達を応援している姿を「〇ちゃん、うれしいと思うよ」と認め、周りの子どもにも伝える。友達を応援することに目が向くようにしていく。 水の危険性についても十分知らせ、水の中で落ち着いて対処できるように、水中でしりもちをつくと立ち上がれることなどを知らせる。	水遊びを楽しく行う。	・水に慣れる遊びを通して、水につかったり移動したりできる(D(1)ア)。 ・浮く・もぐる遊びを通して、水に浮いたりもぐったり、水中で息をはいたりできる（D(1)イ)。
						・運動に進んで取り組み、仲よく運動をしたり、水遊びの心得を守って安全に気をつけたりすることができる(D(2)).
						・水中での簡単な遊び方を工夫できる(D(3))。
	ゲーム	ボールゲーム	・ボールに親しみ、遊びを楽しむ。 子どもの扱いやすい大きさのボールを使う。 ボールを受けとらせる時は、個々に応じた距離や速度を変え、ボールが取れた満足感を味わえるようにする。 いろいろな投げ方で遊びが楽しめるように工夫する。	・ボールを投げる、受ける、つくなどができる。 どの子もボールを受ける、投げる経験ができるように遊びを工夫し、意欲的に遊べるようにする。 保育者がボールをついて手本を見せ、リズミカルな曲や歌に合わせて、繰り返し遊べるようにしていく。	ボールゲームや鬼遊びを楽しく行う。	・ボールゲームでは、簡単なボール操作やボールを持たない時の動きによって、的に当てるゲームや攻めと守りのあるゲームをする(E(1)ア)。
		鬼遊び	・おにごっこを楽しむ。 保育者も一緒に参加し、ルールに変化を持たせたおにごっこをする。繰り返し遊ぶ中でルールが理解できるように、声をかけ知らせる。 走る速度や方向など、体をコントロールしながら走る楽しさを一緒に味わう。	・いろいろなルールのおにごっこを楽しむ。 遊びがスムースに流れ、面白さやルールが理解できるように、保育者が一緒に遊びを楽しむ。 相手の様子を見て、機敏に逃げたり、追いかけたりする。 うまく逃げている子どもやタッチのうまい子どもの姿を周りの子どもに知らせ、どういう動きをしたらいいか、考え合う場をもつ。 遊びが単調になってきたらルールを変えるなど、変化をもたせて持続して遊び込む。		・鬼遊びでは、一定の区域で、逃げる、追いかける、陣地を取り合うなどをする（E(1)イ)。
						・運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたり、場の安全に気をつけたりすることができる（E(2)).
						・簡単な規則を工夫したり、攻め方を決めたりすることができる(E(3))。
	表現リズム遊び	表現遊び	・いろいろな曲にあわせて表現を楽しむ。 なりきって遊んでいる様子を見せ合うことで、お互いに刺激し合い、より意欲的に表現できるようにしていく。 それぞれの特徴を話し合いイメージしやすくする。	・音楽やリズムを聞いて、そのイメージを自由に動いて表現する。 イメージがわくような選曲をしたり、声かけをする。保育者が感情豊かに表現し、「やってみたい！」「△△のようにしたい」と子どもたちが思えるようにする。 ・気持ちをそろえて身体表現をする。 個々の表現から、みんなで1つのものを表現する心地よさがあじわえるように、その過程を大切にかかわる。	表現リズム遊びを楽しく行う。	・表現遊びでは、身近な題材の特徴をとらえ全身で踊る(F(1)ア)。
		リズム遊び	・リズムや音楽に合わせて歩いたり、体を動かしたりする。 体を動かすことの楽しさが全身で感じられるように、リズムにのりやすい曲を選ぶ。 保育者が豊かに表現することで、楽しさを感じ、やってみたいという気持ちがもてるようにする。	・リズムに乗って、からだを動かし、表現する。 のりやすい、リズミカルな曲や知っている曲を選ぶ。みんなで動きを合わせたり、そろって歩いたり、ステップしたり、力を合わせて1つのことする喜びが味わえるようにする。		・リズム遊びでは、軽快なリズムに乗って踊る(D(1)イ)。
			・音を聞き、歩く・走る・留まる・方向転換をする。 楽しんで音の変化に反応できるように、音の高低・強弱・合図に変化をもたせる。 保育者や友だちの動きを見せたり、一緒にするなどして、身体表現の楽しさを知らせていく。	・曲に合わせて速く歩いたり、遅く歩いたりする。 手がふれているか、かかと、つま先がうまく使われているかなど、1人ひとりの状態を把握する。動きやすい曲を選ぶ。 バランスのとれたスムースな歩き方が身につくように、いろいろな歩き方を工夫する。		
			・リズムにあわせて、スキップやギャロップを楽しむ。 リズミカルな音楽を選び、友達と一緒に全身でリズムを感じながら楽しんで遊べるようにする。 ・リズムにのって踊ったり、表現することを楽しむ。 友達とリズムに合わせて動いたり、ふれあったりする楽しさやおもしろさが味わえるようにする。	・連続してスキップ、ギャロップをする。 足を高く上げて跳ぶ、つま先が下向きに伸びる、胸を張るなど、体全体を使った動きになるように知らせる。 友達の動きを見ている子どもは、曲に合わせて手拍子を打つなど、みんなで楽しめるようにする。		
						・運動に進んで取り組み、だれとでも仲よく踊ったり、場の安全に気をつけたりすることができる（F(2)).
						・簡単な踊り方を工夫できる(F(3))。

別表８　「まなびプラン」 表現

				4歳児	5歳児	1年生
表現	えがく・つくる	表現	造形遊び	・いろいろな素材や自然物を使い、作って遊ぶ・飾るなどする。 いろいろな素材や自然物を使って遊べるコーナーを設ける。 同じ材料でも好きな色が選べるなど、それぞれの表現ができるようにしていく。 作る喜びや作った物で遊ぶ満足感が味わえるように、1人ひとりの思いを大切に受けとめる。	・いろいろな素材や自然物を使い、友達と工夫して造形遊びを楽しむ。 子どもの要求に応えていけるように、素材（空き箱や、空き容器など）や用具を十分用意し、分類しておく。	・身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に思いついてつくる（A(1)ア）。 感覚や気持ちを生かしながら楽しくつくる（A(1)イ）。
				・積み木・ブロックなどで、意図した物を作る。 作った物を見せ合ったり、飾ったりすることで、互いの作品を認め合えるような言葉かけをしていく。		並べたり、つないだり、積んだりするなど体全体を働かせてつくる（A(1)ウ）。
				・粘土で遊ぶ。 握る・丸める・伸ばす・くっつける・つまみ出すなどの感触を楽しみながら、形が変化するおもしろさが味わえるようにする。 「～ができたね」と作った物に共感することで、できた満足感や粘土遊びのおもしろさが感じられるようにする。	・イメージしたものを粘土で作る。 のばす・つまみだす・くっつけるなどの粘土の性質を知り、作るもののイメージを広げるようにする。	
				・変化する素材で遊ぶ（粘土・小麦粉・土・砂）。 手のひらや指先を使っての遊びを十分に経験し、形のおもしろさや変化をいっしょに楽しむ。 満足感がもてるように個々に応じて声をかけ、工夫を認めたり、手伝ったりする。	・立体的な造形を楽しむ（粘土・土・砂）。 立体的に表せるように、物には凸凹があるなど、特徴があることを知らせる。 テーマを決めて、イメージして造る機会をつくる。 子どもの工夫している姿を認めたり、感動に共感していく。	
			絵工作	・絵を描くことを楽しむ。 子どもが描きたいとき、すぐ描けるように身近に素材や用具を準備しておく。 描いた絵について話を聞いたり思いを受けとめながら、「また描きたい」という意欲がもてるようにする。	・自由に描くことを楽しむ。 子どもが表現していることを具体的に声をかけ、認める。 日頃から、楽しいと思える遊びを大切にしていく。	感じたことや想像したことから、表したいことを見つけて表す（A(2)ア）。
				・いろいろな素材や用具を使って、作ったり、描いたりする。 用具の正しい持ち方や使い方（はさみ、のり、パス、マーカー、マジックなど）を保育者がやって見せながら、丁寧に伝えていく。 作ったり、描いたりしたものに、意味づけをしたり、表現を認めていく。	・いろいろな用具の使い方を知る。 用具の正しい使い方を見せ（筆の大小の使い分け、パレットの使い方、絵の具の溶き方など）、大切に扱うこと、後始末の仕方を知らせていく。	
				・絵の具で遊ぶ。 画材を準備したり、環境を整え、十分楽しんで、のびのびと描けるようにする。 用具の使い方（絵の具の濃度や絵筆の太さなど）や、大切に扱うことを知らせる。	・いろいろな技法を楽しむ。 素材や表現方法のおもしろさと感動を共有する。	
				・経験したことを描く。 経験したことを具体的に話し合いながら、楽しんで描ける雰囲気をつくる。 どんなことを描いたのか、個々の話を大切に聞く。 何を描いていいのかわからない子どもには、経験が思い起こせるような具体的な言葉をかけ、イメージがもてるようにする。	日頃から「できた」という達成感や遊んで楽しかったという経験を大切にしていく。 描き出しにくい子どもは、どこでつまづいているのか把握し、1人ひとりにあった具体的な声かけをして、描き出せるようにする。	
					・見て描く。 描く前に対象物の特徴を話し合い、イメージがもてるようにする。 自信をもって描けるように、工夫しているところを具体的に認める。	
					・観察したこと描く。 イメージがもちやすいように、見る・さわる・においをかぐなど、観察をする。 題材によって効果が出るような画材を準備する。	
					・お話しを聞いて印象に残ったことを描く。 内容が理解しやすく、年齢に合った、イメージがわきやすい作品を選ぶ。	
				・色や形に興味をもち、紙を切る・折る・つなぐなどの遊びを楽しむ。 保育者が作って見せたり、できた物を飾ったりすることで興味がもてるようにする。 作り方の順序がわかるように絵で示す。 作る物によってのりづけの仕方が違うことを知らせる（一部分・全体・周囲など）。		好きな色を選んだり、いろいろな形を作って楽しんだりしながら表す（A(2)イ）。

表現	えがく・つくる	表現		・折り紙を見本を見たり、手伝ってもらったりしながら折る。 保育者といっしょに折りながら、友達とできあがった物を見せ合ったり、いっしょに遊んだりして、折り紙の楽しさを知らせていく。		身近な材料や扱いやすい用具を手を働かせて使うとともに、表し方を考えて表す（A(2)ウ）。
			遊びにつなぐ	・遊びに必要な物を協力して作る。 子ども達といっしょに考えを出し合いながら作っていく。 子ども達とイメージを確かめ合って、共同制作をする機会をつくり、みんなで作った達成感が味わえるようにする。 ・描いたり作ったりした物で遊ぶ。 いろいろな材料や用具を適切に使えるようにする。 できあがりをイメージし、その後の遊びに期待感がもてるようにする。	・遊びに必要な物を工夫して作る。 遊びに必要な物を考え合い、子どもの姿を見守りながら、声をかけていく。 子どもの発想を受けとめ、自信をもってのびのびと表現できるようにする。	
		鑑賞		・友達の作品を見合う。 描いたり作ったりする過程や作り終えた後で、お互いの作品を見合って、気づき合ったり、共感し合う機会をつくる。		自分たちの作品や身近な材料などを楽しく見る（B(1)ア）。 感じたことを話したり、友人の話を聞いたりするなどして、形や色、表し方の面白さ、材料の感じなどに気づく（B(1)イ）。
	おんがく	表現	歌唱	・みんなで楽しく歌う。 知っている歌・歌いやすいリズムや音程の曲を選び、みんなで歌うと楽しいと感じられるようにする。 毎日の生活の中に繰り返し歌うことを取り入れ、自信がもてるようにする。 ・歌詞を覚え、楽しく歌う。 保育者と一緒に歌うことで、歌詞やメロディーを覚えられるようにする。 イメージをもって歌えるように、歌詞を絵で表す。 姿勢よく歌うときれいな声が出ることを知らせる。	・友達と声をそろえて歌う。 声がそろった時の心地よさを感じさせる。 ・気持ちをこめて歌う。 歌詞の意味をわかりやすく伝えていく。 歌詞を書いたものを貼り、毎日の生活の中で歌っていく。 友達の歌い方を聞いて、声の出し方や気持ちのこめ方などに気づけるよう、グループ別に歌う機会をもつ。 ・曲の感じをつかんで歌う。 保育者が歌ってみせ、曲にめりはりがあることを知らせる。 気持ちが表現しやすい伴奏を心がける。 友達の声を聞き、声をそろえて歌えるように言葉がけする。	・範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする(A(1)ア) ・歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって歌う(A(1)イ)。 ・自分の歌声及び発音に気をつけて歌う(A(1)ウ)。 ・互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う(A(1)エ)。
			器楽	・曲や言葉に合わせてリズム打ちを楽しむ。 手拍子やひざ打ちでリズムをとりながら子どもと一緒に歌ったり、言葉で遊んだりし、楽しさを共有していく。	・楽器でいろいろな打ち方をする。 保育者が楽器を丁寧に扱うところを見せ、扱い方を知らせる。 保育者が打って見せ、動作と言葉で打ち方を知らせる。 使いやすいように、楽器を分類する。	・範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する(A(2)ア) ・楽曲の気分を感じ取り、思いをもって演奏する(A(2)イ)。
				・楽器（カスタネット、鈴、タンブリン）でリズム打ちを楽しむ。 楽器の名前・持ち方・扱い方を知らせる。 リズム打ちがしやすい曲を選び、保育者がして見せながら楽器をならす楽しさを伝える。 ・みんなといっしょにいろいろな楽器で合奏を楽しむ。 楽器の正しい使い方や片づけ方を確認し、大切に扱うことを約束する。 楽器ごとに打ち方を知らせ、音がそろった時の一体感が味わえるようにする。	・いろいろな楽器を使って楽しむ。 保育者が正しい打ち方を知っておく。 リズムが取りやすい曲を選ぶ。 歌や合奏をみんなの前で聞き合う機会をつくる。 いろいろな楽器が楽しめるように、パートの交替などを工夫する。	・身近な楽器に親しみ、音色に気をつけて演奏する(A(2)ウ)。 ・互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する(A(2)エ)。
			音楽づくり			・声や身の回りの音のおもしろさに気づいて音遊びをする(A(3)ア) ・音を音楽にしていくことを楽しみながら、音楽のしくみを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくる(A(3)イ)。
		鑑賞		・友達の歌や演奏を楽しんで聞く。 グループごとに聞き合い、声の大きさや音がそろっているなど、認め合う場をつくる。		・楽曲の気分を感じ取って聴く(B(1)ア) ・音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取って聴く(B(1)イ)。

３．実践事例

（２）生活プラン　「基本的生活習慣」　片づけ

●４歳児

◆めざす子どもの姿

・自己管理：自分の持ち物を確認して、片づける。
・　共　有　：共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。

＜活動内容＞　　＜環境構成と保育者の援助＞

【自己管理】決まった場所に決まった物を置く

○上靴・下靴をはきかえる。 ○登園後、自分のものを片づけたり、降園前に帰り支度をしたりする。	◇靴箱やロッカーに名前と一緒に、それぞれの子どものマークとなるシールなどを貼る。 ◇入園当初は、一緒に片づけることで、片づけの必要性を知らせ、やり方を理解させる。

【　共　有　】自分の物やみんなで使った物の片づけをする

○砂遊びやままごと遊びなど、遊びの後に使った道具を片づける。	◇遊びの後に片づける時間を設け、声をかけることによって、片づけを習慣化する。 ◇分類して片づけられるようにかごや棚などを用意する。 ◇きれいに片づくと気持ちがよいことを一緒に感じていく。

●５歳児

◆めざす子どもの姿

・自己管理：自分の持ち物を確認して、自分から進んで整理整頓をする。
・　共　有　：共同の遊具や用具の準備、片づけをする。

＜活動内容＞　　＜環境構成と保育者の援助＞

【自己管理】自分のことは自分でできる

○自分の持ち物（かばん・かさ など）は自分でもつ。 ○見通しをもって、準備や片づけができるようになる。	◇家庭にも、子どもの持ち物は子どもが自分で持って登降園するように、お願いする。 ◇「片づけがすんだら～をする」という次への期待をもつことで、進んでできるようにする。

みんなで片づけると
早くできるね。

【　共　有　】用具や道具を種類別に分けたり、ゴミを拾ったりする

○遊びの後、自分が使った物だけではなく、みんなで使った物も片づけ、室内のゴミ拾いや掃除をする。	◇最後まで協力して片づけることをねらいとし、その場に応じた言葉かけを工夫する。できるようになったことを認め、自信をもたせる。 ◇ゴミ箱に入れる物の絵を表示して、分別ができるような工夫をする。 ◇子どもが扱いやすい小さいサイズのほうきやちり取りを用意する。

●１年生

◆めざす子どもの姿

・自己管理：自分の持ち物を確認し、次に使いやすいように進んで整理整頓をする。
・　共　有　：共同の遊具や用具の準備、片づけを進んでする。

ここでは、特に幼小の接続を考え、１年生の４，５月の「小学校での片づけ方を身につける（自己管理）」を取り上げます。

＜活動内容＞　　＜環境構成と教師の援助＞

１．持ち物の整理整頓をする

○朝、決められたところへ決まったものを出す。

１年生は、何かと道具が多いため、決まった物を決まった場所にきちんと置いておくようにすると使いやすい。

○持ち帰る物、学校に置いておく物をはっきり分ける。

◇宿題、連絡帳、他の提出物などは、かご、箱、コーナーなど、この場所へいつも出す、という約束をしておく。
◇机の中（引き出し）やロッカーは、何をどう入れるかを決めて、習慣づくまで時々指導する。
◇ランドセルの中を空っぽにし、ロッカーへ戻す習慣を促す。

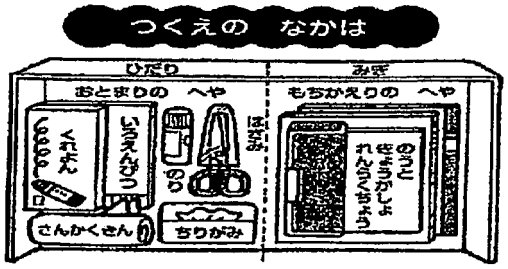
説明だけではわかりにくい場合は、子どもと同じ道具・机の中（引き出し）の様子を写真やイラストにして、貼っておくと分かりやすい。

２．学習の準備・片づけをする

○ふでばこの中
・鉛筆（B、または２B）は、削ったものを５本
・赤鉛筆（または、赤ペン）
・ものさし（ふでばこに入るくらいの長さ）
・名前ペン（フェルトペン）

○下敷き
・やわらかめのもの　　・なるべく無地の物

○机の中

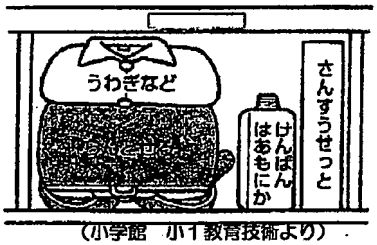


○連絡袋
・前の人から後ろの人へ「はい、どうぞ」「ありがとう」といってプリントを送る。
・プリントの四隅をそろえて２つ折りにし、透明の連絡袋にいれる。

○わすれもの（がんばり表）
・忘れ物が無かった日に、がんばり表に、シールを貼ったり、色を塗ったりする。

できたことにシールを貼ると、視覚的に分かりやすくなり、意欲を高める。

◇筆箱、下敷き、引き出し（机の中）等を用意し、その中に何を準備するのか、また１つひとつに名前を書くことを伝える。説明だけではわかりにくい場合は、子どもと同じ道具・引き出しを写真やイラストにして、貼っておくと分かりやすい。



（小学館　小１教育技術より）

◇片づけが苦手な子どもには、最初は教師が一緒に整理し、やり方を伝える。

◇学級で配るプリントは多いため、すばやく、確実にしまうことができるよう、方法を工夫する。
◇プリントは、一度に何種類も配らない。
◇初めのうちは、入れた袋を上にあげさせ、確認して、「合格」・・・などの手順を取り、慣れるようにさせる。

◇あと一歩頑張れば到達できそうな目標や本人が納得できる目標にする。
◇他の人との比較にはせず、掲示はしないで、個人のがんばり表にする。

（３）まなびプラン　「せいかつ」

●４歳児

◆まなびの姿

・自然観察：自然の事象に関心・興味をもち、親しむ。
・自然利用・工夫：いろいろな自然物を使い、作ったり遊んだり・飾ったりする。

・自然の美しさ、おもしろさ、不思議さ
　「きれいだな、おもろいな、不思議だな」「わたしもやりたいな」
・性質や仕組みに目を向ける
　「もっとやろう」「こうなるみたいだ」
・考える・試す・工夫する
　「これを使おう」「今度はこれでやってみよう」

自然への親しみ・活動の楽しみ → ５歳児へ

◆活動例：『どんぐりであそぼう』

活 動 内 容	ねらい
・落ち葉拾いや木の実集めなど、見る、さわる、とる、嗅ぐなど、子どもが秋の自然とじっくりふれあう機会を積み重ねる。	→ 秋の自然で遊ぶ**楽しさ**を感じる。
・自然とふれあう中で身近な存在となったドングリをコマにして遊ぶ。	→ 自然の中に**新しい気づき**を見いだす。 ・ドングリの**形**の違い。 ・形が違うと**回り方**も違う。

「ドングリで遊ぶと**楽しいよ。**」 → **形**への気づき → 「**丸い**ドングリはよく回るから**楽しいよ。**」

◆遊びの流れ

１．秋になったよ

	＜遊び＞	＜環境構成と保育者の援助＞
９月中旬	○園庭でドングリやいろいろな秋の自然にふれあう。 ・集めたドングリを保育室に飾る。 ・形や手ざわりなどを楽しむ。 ・ドングリの歌を歌う。	◇ドングリや秋の自然物を飾っておけるように、透明なカップなどを多めに用意する。

２．いろいろみつけたよ

１０月中旬	○ドングリや秋の自然物を探したりとったりする。 ・近くの山や公園や並木にでかける。 ・拾ったドングリを子どものイメージで「丸い」「帽子づき」「小さい」「緑」などに分類して保育室に飾る。	◇分類ごとに名前をつける札を用意しておく。 ◇分類した物は、子どもの手の届きやすい所に置く。

３．ドングリゴマであそぼう

１０月中旬～１１月下旬	○集めたドングリを使い、コマを作ったり遊んだりする。 ・保育者と一緒にドングリゴマを作る。 ・丸ドングリのコマを回して遊び、よく回る様子を楽しむ。 ★自分のドングリゴマが回るだけでうれしい。 ☆細長いドングリゴマの回り方を見て、丸ドングリとの違いに気づく。 ・いろいろなドングリゴマを回して遊ぶ。	◇材料・用具の数を多めに用意する。 ◇ドングリの形の特徴などに目が向き始めたときは、発見を認めたり、他と比べたりすることにより、気づきを意識づけるようにする。分類した物は、子どもの手の届きやすい所に置く。

新しい気づき

●５歳児

◆まなびの姿

・自然観察：自然の事象の不思議にふれ、発見の喜びや試したり確かめたりすることを楽しむ。
・自然利用・工夫：自然物を使って、さまざまな遊びを工夫する。

・自然にもっとかかわりたいとの思い
「どうしてこうなるんだろう？」「もっとこうしてみたい」
・性質や規則性、法則性を遊びに生かす
「よく見よう」「ここを工夫すればできそう」
・数量・図形を使い、比べながらよりよい方法を見いだす
「比べてみよう」「他の方法は？」

数量・図形、自然科学の概念の素地 → １年生へ

◆活動例：『秋の宝物であそぼう』

活 動 内 容	ねらい
・秋の自然と充分にかかわり、自然物を使っていろいろな遊びを工夫する。 ・「秋のおたのしみ会」をひらき、グループでお店を出す。友達と共通の目的に向かって遊びを楽しくしていく。 ■お店の１つに「ドングリ転がしゲーム」がある。	→ 秋の自然の**美しさ**や**不思議**さを感じる。 → 自然の中に**新しい気づき**を見いだす。 ・ドングリの**形**の違い。 ・形が違うと**転がり方**も違う。 ・ドングリが**実る木**への気づき

大きさ・形・実る木への気づき

「ドングリが**ゴール**まで転がってうれしいな。」 → 「ドングリは、**形**ごとに**実る木**が決まってる。**形**によっていろいろな**方向**へ転がるのが面白い。もっとドングリを使って遊びたい。」

◆遊びの流れ

＜ドングリ転がしゲーム＞　＜その他の遊び＞　＜環境構成と保育者の援助＞

１．秋の宝物でいろいろな遊びを楽しもう

	＜ドングリ転がしゲーム＞	＜その他の遊び＞	＜環境構成と保育者の援助＞
９月・１０月	○ドングリを使っておもしろいおもちゃや短めのドングリ転がしゲームを作ったりして遊ぶ。	・木の実や落ち葉を使って、きれいな飾りや料理を作って遊ぶ。	◇木の葉や木の実の色や形の美しやおもしろさ、数、木の実の転がり方などに目を向けさせる。

友達とかかわりながら遊びを広げていく活動を保育者が意図的に設定する。

２．「秋のおたのしみ会」をひらこう

１１月上旬	○ドングリを使ったもっと楽しい転がり方をするゲームを作り始める。 ・板に釘を打ってコースを作る。 ★自分で作ったコースをドングリがゴールまで転がるだけで楽しい。 ・ゲームに使うドングリをたくさん集める。 ☆木によって実るドングリの形の違いに気づく。 ・自分達のコースで遊ぶ。 ・ゲームのルールを考える。	・草花の葉や実から色水を作って、紙や布にきれいな模様を染める。 ・落ち葉のスタンプでカードを作る。 ・紙粘土に木の実を並べアクセサリーやお菓子を作る。	◇みんなで力を合わせて「秋のおたのしみ会」を開き、園のみんなに楽しんでもらおうという共通の目標を持たせる。 ◇金槌、釘の使い方を改めて指導する。 ◇グループの相互評価の場を設定する。

保育者が、2 枚の板をつなぐことを提案。

新しい気づき

丸ドングリは、この木になるんだ

文字・数にかかわる活動

３．招待状をつくろう

１１月中旬	**○招待状を作る。** ・年少児に招待状を作って配る。 ・招待状や看板・ポスターでお店の楽しさを伝える。	◇自分たちのお店の工夫やよさを再確認させる。

＜ドングリ転がし＞　子どもたちは、それまでの遊びの中での気づきから、お客さんによって、渡すドングリを変えていた。先生には、細長くて大きいドングリ（転がりにくい）を、年少児には丸くて小さいドングリ（転がりやすい）を渡した。

４．「秋のおたのしみ会」、開店でーす！

１１月下旬	**○秋のおたのしみ会をする。** ・グループごとにお店を開く。 ・お客さんにルールなどの説明をする。 **○ふりかえり会をする。** ・楽しかったこと、がんばったことを発表する。 ・遊び場を残すか片づけるかをグループで決める。	◇充実感や達成感がもてるように、１人ひとりのがんばりや工夫をお互いに認め合わせたり、賞賛する言葉かけをしたりする。

●事例について：「楽しい」「うれしい」体験から「なぜ？」「どうして」を深める体験へ

◇同じ内容の経験を繰り返す

幼稚園から小学校１年生の子どもは、自然に興味をもってかかわる年齢です。この時期、「楽しい」「うれしい」だけで遊びを終わらせず、遊びの中に小学校以降の**「まなび」**の芽を育むためには、年齢に応じた内容の繰り返しが重要になります。幼稚園から小学校１年生に至る長いスパンの中で、身の回りの自然の中から複数の内容を繰り返し扱うことが必要となります。

この時期の子どもは、発達の個人差が大きく、同じ遊びをしていてもねらいを達成する時期が異なります。また、子どもの興味・関心が別の遊びにあれば、その活動内容にふれずに終わってしまうこともあります。そのため、同じ内容を繰り返し設定し、子どもが年齢に応じた自分の願いをもって、自然にかかわれるようにすることが必要になります。

この事例では、４歳児、５歳児とも活動の流れの最初に、年齢に応じた「秋の自然（季節の草花、木の葉や木の実）を使った遊び」の活動を繰り返し行っています。そうすることで、それぞれの子どもが「自然（草花）への親しみ」をもち、「自然物（木の葉や木の実）の特徴・性質」や「形や数」に気づくことが可能となります。

◇遊びを深めるために

遊びの中で、「楽しい」「うれしい」といった充実感や満足感を覚えることは、幼児期には非常に大切なことです。自己充足感は、自信を深め、自尊感情を高めます。しかし、そこで活動を終わるのではなく、一歩進めて、「なぜだろう？」と疑問をもち、「もっとやってみたい」と意欲的に活動に取り組むことが必要になります。幼小の接続期には、多様な活動の広がりだけではなく、１つの活動にじっくりと取り組む、活動の深まりが求められます。

その時に重要になってくるのが、友達との協同です。自分と形の違うドングリを転がす友達がいて、ドングリの形の違いや、形が違うことによって転がり方が異なることに気づき合います。また、保育者がグループ単位の活動を設定することで、グループ内での協同が生まれます。「秋のおたのしみ会」に出店するために、グループでよりよいお店にしていくための話し合いや協力が必要になるのです。「おたのしみ会」の終わりには、ふりかえりの会をもつことも大切です。グループの中だけではなく、クラス全員の友達と自分たちのがんばりを認め合う機会になります。このように、友達とともに、１つの遊びを深めていく経験を重ねていくことが、接続期の子どもには求められます。

グループ単位の活動をしかけるなど、保育者の援助は重要です。また、この事例では、ドングリの形や形による転がり方の違いに着目しやすいように、保育者が板を２枚つないだ緩やかで長いコースを作ることを提案しています。子どもたちが遊びを深め、まなびの芽を育むためには、保育者の援助が不可欠なのです。

＜写真＞

・柏原市立玉手幼稚園
・瀬田市立瀬田北幼稚園（滋賀県）
・奈良教育大学附属幼稚園
・京都教育大学附属幼稚園

（引用文献）２・３章

1）多久市教育委員会　(2008)　たくっ子プログラム：就学前教育と小学校教育の適切な接続のために
2）柏原市幼稚園教育課程研究会　(2005)　柏原市立幼稚園教育評価規準
3）福山市・福山市保育連盟　(2008)　福山市保育カリキュラム
4）山口県 幼・保・小連携推進協議会　(2004)　つながる子どもの育ち：幼保・小一貫指導をめざして
(http://www.pref.yamaguchi.jp/gyosei/kyo-gimu/tsunagaru/top.htm)
5）新潟大学教育人間科学部附属長岡校園　(2007)　科学をつくりあげる学びのデザイン：学びの壁を越える幼・小・中連携カリキュラム　東洋館出版社
6）佐賀市教育委員会・幼保小の接続を考える会　(2009)　平成 21 年度版　ソフトプログラム「わくわく」（小学校編）

おわりに

「生活とまなびの幼小カリキュラム『あんじょう』」は、柏原市が平成 20 年度に立ち上げた「幼・小・中一貫教育検討委員会」の成果として、委員会の議論をもとに作成したものです。

「幼小中一貫教育」は、１人ひとりの子どもの視点に立って、保育・教育をつないでいく営みです。委員の１人として、委員会に参加させて頂く中で、またカリキュラムを作成する段階でご尽力頂いた先生方との出会いの中で、柏原市の先生方の「１人ひとりの子どもを大切に育てていこう」という熱い想いが伝わってきました。そうした想いを受けて、カリキュラムの中には「１人ひとりを大切にする」視点をこめたつもりです。

このカリキュラムでは、各年齢段階の子どもの姿と保育者・教師の支援・指導のあり方を、「ここまで育てなければならない」といった達成目標としてではなく、「こうした姿に育てたい」という方向目標として記載しています。子どもにとって幼小の段差がなめらかなものになるよう、保育・教育の１つの指針として参考にしていただければと思います。

また、このカリキュラムは最終決定版ではありません。先生方の日々の実践のなかで、このカリキュラムが目の前の子どもたちの姿にあうものなのか、ご検討頂き、修正・改善を重ねて頂ければと思います。子どもたちをいちばんよく理解されているのは、日々子どもたちと生活を共にされている先生方です。先生方の手で、よりよい**「あんじょう」**を作成して頂くことを願っております。そして、最終的には保幼・小・中の年齢段階の子どもの姿を一覧できる**「あんじょう」**の完成を期待しております。

このプログラムが、柏原の子どもたちの 15 の春を輝かせる一助となれば幸いです。

平成 21 年３月

奈良教育大学　　横 山 真貴子

生活とまなびの幼小カリキュラム「あんじょう」

発 行 日　：　平成２１年３月
発　　行　：　柏原市教育委員会
印　　刷　：　株式会社　春日
編　　集　：　柏原市教育委員会教育部指導課
〒５８２－８５５５
柏原市安堂町１－４３
電話　（０７２）９７２－１５０１
編集協力　：　奈良教育大学
准教授　横山　真貴子